

専門学校 愛知保健看護大学校
保健看護学科

二〇二二年度 入学試験（一般前期）

国語総合（現代文）

注意

1. 問題は全部で6ページあります。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

問題一 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

今日は日本の近代化のひとつの(ア)ソクメンとして、お金のことを考えてみたいと思います。

(イ)いわゆる近代化とともに金にたいする人々の観念がどう変ったか、それがどうなつて行くだろうかという問題ですが、これはなかなか一筋縄で行きません。すべて金に関することは、複雑にもつれやすいもので、金は魔者(まもの)などよく言われますが、(ロ)この金の魔性が、誰はばかるところなく、発揮されたのが近代であるとも考えられます。

さて、金の魔性については、むかしから多くの人々がふれて居(お)ります。金さえあれば老人も青年と同様、女からちやほやされるし、二目(ふため)とみられない老婆も、絶世の美女の扱いをうけるという諺(ことわざ)が、たしか西洋の中世にあったように記憶します。

しかし、それでは、このような金の力が、そのまま素直に社会一般からみとめられ、尊敬されていたかという点、そうは行かなかったようで、その魔力が強いほど、社会のそれにしたがうという点も強かったようです。

大体、金銭は(ア)主義者です。千円の金は誰が持つても千円に通用するのが原則で、これは今では誰でもあたりまえのことになっていますが、むかしで言えば社会の秩序に反する例外でしょう。千円の金を持つということは、乞食にも大名にも同じ力をあたえるので、その金で買える(ロ)ハンイでは二人は同等ということになります。これがけしからぬ例外であることは言うまでもありません。

たんに(ア)主義者であるだけでなく、金銭はまた(ロ)主義者でもあります。というのは金がほしいために何かをする者は、自分が他人からの強制でなく、自由意思でしていると思つているからです。つまり金が必要ないと思えば、そんなことをしなくてもいいという意味では、それはいつも自由な行為であるわけです。

古代においても商業のあるところに自由平等の人間関係が生れる、ギリシャがその例だ、とある人が言いましたが、ギリシャが古代世界では例外の国であったように、個々に生れる人間関係は、古代や封建の社会は例外でした。

社会が細かな上下の身分に分れ、社会の営みの大部分が、命令によつて行われる社会で、金銭による人間関係は、その自由と平等という性格で、社会秩序の破壊者でした。

金銭の生みだす、自由で平等な人間関係が、封建社会で例外であったのは、さきにふれた通りですが、同時にそれは、相手の親切心とか正義感、あるいは同情などに訴えない点で、一種の非(ロ)的な面を持つていることも注意する必要があります。

僕らがここで人に何をやろうと、また何をサーヴィスしようとして、(ハ)ホウシユウとしてお金をうけとれば、それは金が目当であったことになり、金さえもらえば、誰にでも同じことをしただろうと見做されます。

僕らはそこで、相手に好意を持つ必要もないし、相手から感謝を要求する権利も持ちませ

ん。すべては「金づく」で片付いてしまい、誰が誰にしてやってもよい一種の非 C 的な抽象性をおびた行為になってきます。

これも、考えてみると自由と平等の一面であり、あるいは (d) ハクアイにも通じるかも知れませんが、ともかくこうした性格の行為が、権威と身分の秩序で構成された古代社会、あるいは封建社会で、例外的な、秩序をみだすものであることはたしかです。

(3) 封建社会において、商行為自体が必要悪として許容され、商業に従事する者が、社会の最下層におかれたのは、この理由にもとづくものでしょう。

したがって、封建社会では、金銭は—少なくとも表向きは—卑しむべきものであったので、人前で口にすべきものではないという意味で、*阿賭物あとぶつなどと言われてきました。

さきに言ったように、封建社会では、金銭による人間関係(平等であり、自由意思にもとづき、その行為自体が目的であり、あとに貸し借りや恩怨おんえんがのこらない関係)はむしろ例外であり、人間同士の結びつきをなくし、秩序を破壊する性格を持っています。

社会の近代化、あるいは資本主義化は、この例外を一般化し、それを社会全般を通じての人間関係の基盤におくことです。これをもっと具体的に言えば、身分制度を破棄し、実力ある者はいくらでも出世できる世の中をつくりだし、金をその実力の象徴と考えることです。金を卑しめることは、金を動かし、それによって生活する階級をも軽蔑することですから、金銭の解放は、つまり町人階級の社会の各方面への進出であり、同時にそれは身分制度の (c) テツパイも意味したわけです。

中村光夫「金銭と精神」(『秋の断想』所収)より

註 *阿賭物⇨金銭のこと。中国の俗語で「このもの」の意。金銭を忌んでこう呼んだ。

問一 傍線 (a) ~ (e) のカタカナを漢字に直して書きなさい。

問二 傍線 (1) の問に対する答えとなっている段落はどれか。その段落の冒頭の六字を抜き出して書きなさい (句読点等も字数に含む)。

問三 傍線 (2) とあるが、近代になるとともに発揮された「金の魔性」の本質を述べていることばを文中から十字以内で抜き出して書きなさい。

問四 空欄 A ~ C に入れるのに最適な漢字二字の語をそれぞれ文中から抜き出して書きなさい。

問五 傍線 (3) とあるが、「商業に従事する者が、社会の最下層におかれた」という「封建社会」の秩序を構成するものとはどのようなものか。二つ挙げなさい。

問六 文中からは次の文章が脱落している。挿入するのに最適な箇所はどこか。直前の六字を抜き出して書きなさい（句読点等を字数に含む）。

つまり金力をしばっていたさまさまの社会的束縛を断ち切り、金の本来のもつていた力を充分認識して、それを役立てようとする考えです。これは今まで、「汚物」と少なくとも表向きは見なされていたものを、公然と貴重品扱いすることですから、社会意識の大変革を意味します。

問題二 次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

（北海道で夫とともに野性馬の飼育を手がけているお登勢が、夫の留守のある夜、外で物音がするので出てみると、オテナと呼ばれる野性馬のリーダーが、鹿毛かげと呼ばれる捕えられた雌馬を連れもどすために牧場へやってきて、鹿毛に牧場の柵を飛び越えさせようとしている。）

オテナは片足で地面をけりながら、柵に向かっていなないた。彼は鹿毛に跳べ、と言っているのだった。鹿毛も走り、跳ぼうと試みた。だが、彼女にとっては柵は高すぎた。ほかの馬も彼女にならって、それぞれ柵めがけて走ったが、一頭として跳躍に踏み切れるものさえなかった。鹿毛が悲しげな声をあげて、首を振った。すると、オテナはまた見事な跳躍で柵の中へもどり、鹿毛に寄り添って、鼻をすりあわせた。その一連の動作を、オテナは驚くべき根気のよさで反復し続けた。(1) 彼の体は汗で光っていた。

お登勢はわれを忘れて、その光景を見守っていた。長い時間のもようであった。いつか、胸のしびれるような **A** が、彼女をとらえていた。彼女はよほど飛び出していったら、鹿毛を柵から出してやろうかと思った。あの二頭をこんなふうにして隔てておく権利は誰にもないような気がしてならなかった。オテナの必死の努力に対しても、鹿毛は彼に返すのがほんとうだと思わずにはいられなかった。事実、何度か木陰から出て行きかけもした。もし、オテナに対する尊敬の思いが、もう少し底の浅いものであったら、当然、(2) お登勢は柵の横木をはずしてやっていたにちがいがなかった。だが、オテナは偉大な統率者である。彼には抜群の能力と勇気がそなわっていると同時に、それにふさわしい自尊心がなければならぬ。それなら、彼が努力を放棄しないのに、はたから手を貸すのは、彼を侮辱することになるといふ思いが、(3) かるうじてお登勢を木陰に踏みとどませた。それは、(4) オテナが彼女の意識の中で、たんなる野生馬以上のものになっていることを意味してもいた。彼の意志と能力に任せよう——とお登勢は思った。

お登勢はそっと木陰から身をひいて小屋へ引き返して行った。「狼なんかじゃなかった

よ。」おびえきつた、いまにも泣き出しそうな顔つきで、炉端から駆け寄ってきた*仙吉の肩を抱いて、お登勢は言った。「オテナって、お前にも話したろ。三百頭もの群れの頭の、白い馬さ。あれがね、鹿毛を迎えに来たんだよ。オテナは鹿毛の御主人なんだよ。お前にも見せたかった……。」「それでどうした？ 鹿毛を連れて行ったの。」⁽⁵⁾ 仙吉はようやく顔の色をとりもどした。「まだ。鹿毛に柵を飛び越えることを教えているところなの。くり返し、くり返し、自分が跳んでみせてね」「見たいな、僕も……。」「そっとしておいてやろうよ。一生懸命なんだから……。夜が明けたら行ってみよう。もしかしたら、みんないなくなっているかもしれないよ。」と、お登勢は言った。それを願ってでもいるかのような声の色であった。

しかし、夜が明けるのを待ちかねるようにして、牧場へ行ってみると、オテナの姿はすでになく、鹿毛もほかの馬も柵のなかにそろっていた。どの馬にも疲れが見えた。「やっぱり連れて行けなかったんだね。」仙吉は弾んだ声をあげた。一頭でもいなくなれば、それだけ損害をこうむるわけだから、ほっとしなければならぬところなのに、⁽⁶⁾ お登勢はふとため息をもらした。

船山馨『お登勢』より

註 *仙吉お登勢の兄の子供。

問一 傍線(1)は、どのようなことを表していますか。次の(ア)～(オ)の中から最適なものを一つ選び、記号を書きなさい。

- (ア) オテナの誇り
- (イ) オテナの努力
- (ウ) オテナの疲労
- (エ) オテナの焦り
- (オ) オテナの悲しみ

問二 空欄Aに入れるのに最適なことばを次の(ア)～(オ)の中から一つ選び、記号を書きなさい。

- (ア) 驚嘆
- (イ) 歓喜
- (ウ) 感動
- (エ) 苦痛
- (オ) 失望

問三 傍線(2)とあるが、お登勢が柵の横木をはずしてやらなかった理由を次のように

説明する際、空欄に入れるのに最適な箇所を文中から十字前後で抜き出して書きなさい。

から。

問四

傍線(3)「かろうじて」の意味として最適なものを、次の(ア)～(オ)の中から一つ選び、記号を書きなさい。

- (ア) きつと
- (イ) そつと
- (ウ) ふつと
- (エ) もつと
- (オ) やつと

問五

傍線(4)とあるが、お登勢はオテナをどのような存在として受け止めているか。次の文の空欄 i・ii に入れるのに最適な漢字二字の語をそれぞれ書きなさい。

i

すべき、

ii

と同じような存在。

問六

次の文は、傍線(5)について説明したものです。文中の空欄 I・II に入れるのに最適なものを(ア)～(エ)の中からそれぞれ一つずつ選び、記号を書きなさい。

仙吉は、「狼なんかじゃなかつたよ」というお登勢の言葉に

I

し、さら

に、馬の話聞いて興味をそそられ、それまで抱いていた

II

感からしだいに解放されていったのである。

I (ア) 樂觀

(イ) 同意

(ウ) 感激

(エ) 安心

II (ア) 焦燥

(イ) 恐怖

(ウ) 不快

(エ) 嫌悪

問七

傍線(6)のお登勢の行為は、彼女のどのような気持ちを表しているか。次の

(ア)～(オ)の中から最適なものを一つ選び、記号を書きなさい。

(ア) 再度オテナがやってきて馬たちを連れ出すのではないかと心配するとともに、狼の被害を非常に恐れる気持ち。

(イ) 自分の気持ちと反対にひどくはしゃいでいる仙吉を残念に思うとともに、鹿毛を解放してやろうと思う気持ち。

(ウ) オテナの試みは成功するようにと願った自分を本当に情けなく思うとともに、家の経済状態を心配する気持ち。

(エ) うまく鹿毛を助け出すことができなかつたオテナに同情するとともに、期待がはずれて多少残念に思う気持ち。

(オ) せっかくの機会を生かせずに帰ったオテナに不信感を持つとともに、鹿毛を
かわいそうに思い同情する気持ち。

受験番号
氏名

問題一						
問六	問五	問四	問三	問二	問一	
		A			d	a
		B			e	b
		C				
						c

問題二						
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
	I	i				
		ii				
	II					